

第 213 回通常国会

村田きょうこ 「今回の質疑のポイント」 No.2

2024 年 2 月 21 日（水）資源エネルギー・持続可能社会に関する特別委員会



ご安全に！ 参議院議員の村田きょうこです。

7日に引き続いて、2月21日(水)に資源エネルギー・持続可能社会に関する調査会で、参考人質疑を行いました。今回のテーマは「脱炭素社会の実現に向けた論点」で、

- 1 . 国によって異なるカーボンニュートラル目標年**
- 2 . 多くのコストをかけずに CO<sub>2</sub> を削減するには**
- 3 . 2030 年の削減目標についてどう考えるか**
- 4 . 脱炭素の技術開発に対する国の支援**

の観点から質疑をしました。

※詳細は次頁以降、または YouTube をご覧ください。



## 1. 国によって異なるカーボンニュートラル目標年

### 【課題認識】

- ・日本は2050年にカーボンニュートラルを達成すると公表しているが、中国は2060年、2070年を目標としている。
- ・生産拠点が規制の厳しい国から緩い国に移転すれば、温室効果ガスは減らない、あるいは増える可能性がある。

**村田：中国やインドと目標年が違うことは国内産業にとって不利。雇用にも打撃が生じる。この違いに日本としてどう取り組んでいくべきか？**

秋元圭吾参考人：そもそも目標年を守るのか、口で言っているだけではないのか、ということは理解しておく必要がある。2050年という明確な目標を持つことは良いことだが、相手国や周りがどれくらい削減しているかを見ながら、柔軟性をもって対策を進めていくことが重要。さもなければ、中国やインドに需要を採られて、むしろ世界の排出量が増えることになる。

## 2. 多くのコストをかけずにCO<sub>2</sub>を削減するには

### 【課題認識】

- ・目標を達成するために必要な費用は、日米欧の300ドル/tCO<sub>2</sub>に対して、途上国の多くはその1/10程度、あるいは追加費用をかけずに達成できる。

**村田：途上国にCO<sub>2</sub>を回収する設備を導入すれば、コストを多くかけずに世界の脱炭素化が進むのではないか？**

秋元圭吾参考人：再生可能エネルギーが安く、CO<sub>2</sub>の貯留ポテンシャルがある国は、日本よりも相当安いコストで削減できる可能性がある。日本が実証で蓄えた技術を海外で展開し、それをクレジットの形で日本の削減にカウントすることは、世界全体の費用対効果の高い対策として重要と思う。

**村田：二国間クレジットに対する評価はどうか？**

秋元圭吾参考人：二国間のプロジェクトごとで一つ一つ話をしていると、量が稼げない。これをどうやって拡張していくかは重要な課題で、政府や国会にはその問題意識をもって取り組んでいただきたい。

## 3. 2030年の削減目標についてどう考えるか

### 【課題認識】

- ・2050年カーボンニュートラルを達成するためには、過渡期である2030年～2040年くらいまでは排出量を増やした方が合理的な場合もある。

**村田：2050年目標を達成するためには、過渡期をどう考えるかが重要。石炭火力へのアンモニア混焼率も、現在の20%から100%にするための過渡期にあるんだという考え方についてどう考えるか？**

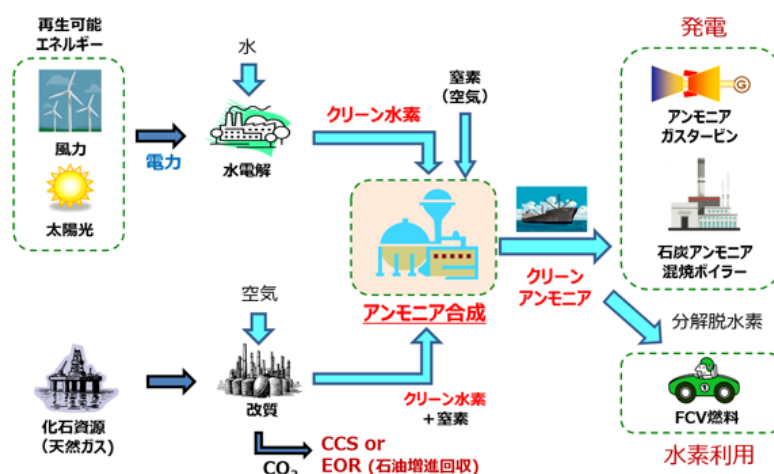
秋元圭吾参考人：カーボンニュートラルというと、直線でどの部門もすべて一律に削減するイメージが浮かぶが、CO<sub>2</sub>を削減するためのコストは部門によって違うので、そ

れをしてしまうと全体のコストを引き上げてしまう。合理的な排出削減をすることが、日本の、ひいては世界全体のカーボンニュートラルの近道でもある。

アンモニア混焼についても、最初は20%から徐々に増やしていく、また、アンモニアの中身\*も、初期はグレーかもしれないがブルー、グリーンへと変わる中で、両方が効いてコストがぐっと下がるという道筋が描ける、そんな理解が必要と思う。

### 【アンモニアの中身】

アンモニア (NH<sub>3</sub>) は、水素 (H<sub>2</sub>) と窒素 (N<sub>2</sub>) を合成して製造するが、そこで使用する水素をどうやって作るかでアンモニアの色が識別される。①化石燃料を燃焼させるだけ＝グレー、②化石燃料を燃焼させた際に排出されるCO<sub>2</sub>を回収し、貯留または再利用する＝ブルー、③再生可能エネルギーで水を電解する＝グリーン



## 4. 脱炭素の技術開発に対する国の支援

### 【課題認識】

・カーボンニュートラルに関する技術開発競争に関し、各国ともに資金を拠出する動きがある。

**村田：各国がアンモニア合成燃料に対しさかんに開発投資をしている中で、日本の投資額は十分か？ また研究開発以降に対する国の支援についてどう感じているか？**

渡邊昌宏参考人：各国の施策によってプロジェクトの動き方は全く異なる。南側は総じてグリーンプロジェクトが目白押しの状態。一方でアジアは、グリーンはゼロ、ブルーが7件。北米はブルー22件、グリーン1件、ヨーロッパはブルー、グリーンともに24件ずつの状況。我々としては、ブルーのグリーン化に補助金が出ることに目をつけて、社員をアメリカに長期出張させている。これから世界の国がどういう形で動いてきているかをウォッチしながらそれに適したプロジェクトを創設していこうと考えている。

以上